

〔学術論文〕

CMCにおける参加平等化効果と 「隠れたプロフィール」問題

Participation equalization effects in face-to-face and computer-mediated discussion groups: Using a hidden profile task.

久保田 健市

Kenichi Kubota

Studies in Humanities and Cultures

No. 12

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』第12号抜刷

2009年12月

GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES

NAGOYA CITY UNIVERSITY

NAGOYA JAPAN

DECEMBER 2009

〔学術論文〕

CMCにおける参加平等化効果と「隠れたプロフィール」問題
Participation equalization effects in face-to-face and computer-mediated
discussion groups: Using a hidden profile task.

久保田 健市
Kenichi Kubota

Abstracts Previous Studies have argued that groups interacting via computers (CMC groups) have more equal participation among members than groups interacting face-to-face (FTF groups) . The relation between participation equality and quality of decision making in FTF and CMC groups was examined using a hidden profile task (Stasser & Titus, 1985, 1987) . University students read descriptions of 2 options of a decision making task, which contained identical information with other members or partial information biased against the most favorable option. Then they met in 3-person (or 5-person) FTF (or CMC) groups to discuss and decide the best option. In interacting face-to-face, 3-person groups have more participation equalization effects than 5-person groups. Whereas group size effects were eliminated in computer-mediated groups. Group members' decision, however, revealed that they were subject to biased information and failed to decide the most favorable option.

Key words : computer-mediated communication, a participation equalization effect, a hidden profile, group decision making

コミュニケーションは、人間の社会活動の最も基本的なものであるが、道具や技術によって、空間・時間・参加人数の制約から人間を解き放つための革新が、古くから行われてきたという特質を持つ。特に、1990年代以降の情報通信技術の発展は目覚しく、半導体技術の発展に伴う情報通信機器（パーソナル・コンピュータ、携帯電話など）の小型化・廉価化と通信網の整備（インターネット）により、コンピュータを介したコミュニケーション（Computer-Mediated Communication: CMC）は、もはや日常的な行為となっている。一方、CMCの活用は、これまで職場環境での活用が先行して行われてきたこともあり、集団討議や意思決定へ及ぼす影響についてさかんに検討されてきた（Hollingshead, 2004）。

CMCによる集団意思決定では、対面状況 (Face-to-Face: FTF) に比べて、成員間の地位格差が意識されにくいことが以前より指摘されている (川上・川浦・池田・古川, 1993; Kiesler, Siegel, & McGuire, 1984; Weisband, Schneider, & Connolly, 1995)。FTF 集団における低地位の人々は、集団討議を行っても参加率が悪く (Bonito & Hollingshead, 1997)、集団意思決定に対する影響力が少なく (Schneider & Cook, 1995)、高地位の人の意見に同調しやすい (Humphreys & Berger, 1981)。これに対し、テキストを介したコミュニケーションが中心の CMC では、相手や自分の顔の表情や仕草、声の調子など、FTF であれば伝達されるはずの非言語的コミュニケーション・チャネルを介した情報が欠落しやすい。このような CMC の情報ろ過 (cue-filtered-out) 機能は、コミュニケーション状況の匿名性を高め、当事者間の社会的な地位や立場を相互に認識しにくくする (社会的文脈の減少)。その結果、CMC では、課題指向的で自由活発な議論となり、低地位成員の集団意思決定に対するエンパワーメントを改善させると考えられる (川上他, 1993)。これは、CMC における参加平等化効果 (participation equalization effect) と呼ばれる。

これまで、CMC における参加平等化効果は、集団成極化 (group polarization) という観点から検証されることが多かった。Stoner (1961) は、成功する見込みは小さいが高い利得が得られる選択 (リスク志向選択) と成功する見込みは大きい利得の低い選択 (確実性志向選択) との間で二者択一させる選択ジレンマ課題を用い、集団決定が、討議前になされた個人決定の平均よりもリスク志向を強めることを明らかにした (後の研究で、集団討議による態度の極端化は、確実性志向の方向にも起こることが確認されている)。集団成極化の観点から検証した先行研究では、CMC は集団成極化を生起させる (もしくは、規模を拡大させる) と、かえって CMC の弊害を報告するものが多い (Dubrovsky, Kiesler, & Sethna, 1991; Kiesler et al., 1984; 木村・都築, 1998)。しかし、白石・遠藤・吉田 (2002) は CMC で集団成極化が生じないという実験結果を示すなど、必ずしも一貫した結果が得られているわけではない。さらに、先行研究が前提にしていた、参加平等化により集団成極化が抑制されるという仮定も、その論理的妥当性は必ずしも明確ではない。集団成極化の生起に関する説はいくつか提出されているが、そのうちの 1 つである説得的論拠説 (Bernstein & Vinokur, 1977) は、活発な意見交換がなされることを集団成極化の原因とみなしている。説得的論拠説に基づくと、むしろ参加平等化によって集団成極化の程度は大きくなるといえ、逆の仮説を論理的に導くことも可能である。集団成極化が、参加平等化効果の妥当な検証パラダイムだとしても、別の観点・課題を用いて検証する必要性は変わらないであろう。

本研究は、CMC における参加平等化効果の検証に「隠れたプロフィール」(hidden profile) 課題を用いる。Stasser & Titus (1985) は、学生会長の候補者 3 人のうち 1 人を選ぶ課題を 4 人集団に行わせた。意思決定を行うにあたり、実験参加者は候補者に関する情報を個別に渡され、これをもとに意思決定することができた。渡された情報の構成 (一部のみ抜粋) は Table 1 の通りである。情報共有条件では、すべての集団成員が同じ情報を等しく渡された。これに対し、情報非共

Table 1

Number of items of information about each candidate
received by group members (Stasser & Titus, 1985)

Condition and Information Valence	Candidate		
	A	B	C
Shared			
Positive	8	4	4
Neutral	4	8	8
Negative	4	4	4
Unshared			
Positive	2(8)	4(4)	1(4)
Neutral	4(4)	5(8)	8(8)
Negative	4(4)	1(4)	1(4)

note. Total number of information provided to discussion
group in parenthesis. This table is made by the author based
on Stasser & Titus (1985)

有条件では、すべての成員に共通して与えられる情報は一部のみであり、残りは、各成員に分散して与えられた。これにより、個々の成員に与えられた情報のみを見れば好ましく知覚されないが、集団全体で見れば好ましく知覚される選択肢（候補者A）と、逆に個人の観点からはポジティブだが、集団の観点からはネガティブに知覚される選択肢（候補者B）が存在した（隠れたプロフィール）。討議後の意思決定では、隠れたプロフィールが存在する情報非共有条件では、個人の観点からポジティブに見えるが、集団の観点からはネガティブに知覚される選択肢の選好が高く、個人の観点からはネガティブで、集団の観点からはポジティブに知覚される選択肢の選好はわずかだった（.75 vs. .11）。その後、同様の課題を用いた一連の研究が実施されたが、集団討議において非共有情報が必ずしも意思決定に利用されないことが、繰り返し確かめられている（Stasser & Stewart, 1992; Stasser, Taylor, & Hanna, 1989, Stasser & Titus, 1987）。川上他（1993）の議論のように、CMCが参加平等化効果により課題指向的で自由活発な議論を促すのであれば、CMCは隠れたプロフィールを含む集団討議で、潜在的な優位性を持つ選択肢の選好を高めることができるだろう。また、FTFでの会話と異なり、テキスト中心のコミュニケーション事態であるCMCでは、各成員の過去の議論がログとして記録に残り、閲覧しやすくなるため、隠れたプロフィールの優位性を発見しやすいと考えられる。

先行研究にて隠れたプロフィール課題を用いFTF状況とCMC状況での集団意思決定を比較したのは、Hollingshead（1996）のみである。Hollingshead（1996）は、最良の選択肢を1つ選択する決定より、各選択肢の選好順位を決定する方が、すべての選択肢をより詳細に検討すると考えられるので、選好順位の決定の方が隠れたプロフィールを含む選択肢の選好を高めると仮定した。

ただし、こうした決定手続きの効果が見られたのはFTFのみで、CMCでは決定に対する他者影響のインパクトは弱められたが、決定手続きによる選好の違いは見られなかった。Hollingshead (1996)では、CMCはむしろ隠れたプロフィールを含む意思決定を改善できないという結果であったが、先行研究の質・量ともに十分ではなく、さらなる検討が必要である。以上より、参加平等化効果によって、CMCが隠れたプロフィールを含む意思決定を改善するかどうかを検証することを本研究の第1の目的とする。

本研究の第2の目的として、参加平等化効果に影響を及ぼす要因として、集団サイズを操作して、その効果を検討する。FTF状況では、集団サイズが大きくなるにつれ発言権や時間をめぐる競争が激しくなり、参加平等化が達成されにくいだろう。これに対し、CMCでは他者の発言を読みながら自分のコメントを用意できることなどから、集団サイズの影響を受けにくいと予測される。

本研究で検証される仮説は、以下の通りである。

仮説1 CMC集団は、FTF集団より参加平等化が高く知覚されるだろう。

仮説2 FTF集団では、集団サイズが小さい場合に参加平等化が生じやすいが、CMC集団では、集団サイズの違いによって参加平等化に差が生じないだろう。

仮説3 FTF集団では集団サイズが大きくなると、隠れたプロフィールに基づく決定がなされにくくなるだろう。

仮説4 CMC集団では集団サイズの違いにかかわらず、隠れたプロフィールに基づく決定を採択しやすいだろう。

方 法

実験参加者 大学生38名(女性32人, 男性6人)。年齢は $M=20.8$ 、 $SD=1.94$ であった。

実験計画 コミュニケーション状況(CMC/FTF)×集団サイズ(5人/3人)×情報分配の形態(共有/分散)の3要因計画であった。コミュニケーション状況と集団サイズは被験者間要因、情報分配の形態は被験者内要因とした。

実験装置 CMC条件では、実験室内に個別に仕切られたブースを作成した、そして、各ブースにPC端末を置き、ウェブサーバとネットワークで接続し、電子掲示板(BBS)システムを構築した(Figure 1)。ウェブサーバの構築には、Apache上で作動する電子掲示板用PHPスクリプトを作成した(著作権フリーで公開されているスクリプトを実験にあわせて改変した)。

討議課題 Stasser & Titus (1985)のモデルに従い、二者択一の意味決定課題を2題(結婚相手・就職先決定に関するもの)作成した。それぞれ、意思決定の選択に影響を与える情報を一方に7つ、他方に5つ設定した。情報共有条件ではすべての情報を等しく各成員に与えた。情報分散条件では、一方の選択肢について、無作為に選ばれた3つの情報をそれぞれの成員に提供し、集団全体で7

つの情報を与えた。もう1つの選択肢については、5つの情報を等しく各成員に与えた(付録参照)。

手続き 実験参加者は3人または5人一組で実験に参加し、半数は互いに顔を合わせるように対面して着席し、残りの半数は端末の置かれたブースへ個別に入れられた。CMC群の参加者については、パソコンのキー操作が可能であることを確認した。はじめに、実験参加者は意思決定課

題と判断材料となる情報を文書で提示され、個別に意思決定を行った。その後、集団討議を行なった。集団に与えられた情報は、各成員間で共通であった(情報共有条件)か、一方の選択肢について、成員間で異なる種類の情報を与え、情報は分散していた(情報分散条件)。なお、FTF条件では討議前に名前などの簡単な自己紹介を実験参加者に行わせた。CMC条件では人物の特定を避けるため適当なハンドルネームを使用した。集団討議の制限時間は15分とし、それを超えた場合には討議を打ち切り、集団での決定を求めた。討議内容は音声またはテキストデータとして記録した。

集団討議後、質問紙(討議後質問紙)に回答し、別の課題で情報共有の条件を変えて、2度目の集団討議を行った。課題および情報共有の操作に関する順序は無作為化した。2度目の討議終了後、実験後質問紙に回答して終了した。

質問紙 各集団討議の直後に実施された、討議後質問紙の内容は次の通りであった。(a) 立場の平等化:「相手と自分の立場は平等だったと思いますか」など4項目を新たに作成した、(b) 同調圧力:「特定の人の意見に左右されたと感じますか」など2項目を新たに作成した。どちらも「全くそう思わない」から「非常にそう思う」までの7件法で尋ねた。

さらに、実験後質問紙では、次の事柄について尋ねた。(c) 情報ろ過機能:「気軽にコミュニケーションできましたか」など8項目を、木村・都築(1998)をもとに作成した、(d) 親近感:「相手に対して親しみを感じましたか」など2項目を新たに作成した。(e) 存在感:「各個人の存在を強く意識しましたが」など2項目新たに作成した。いずれも「全くそう思わない」から「非常にそう思う」までの7件法で尋ねた。

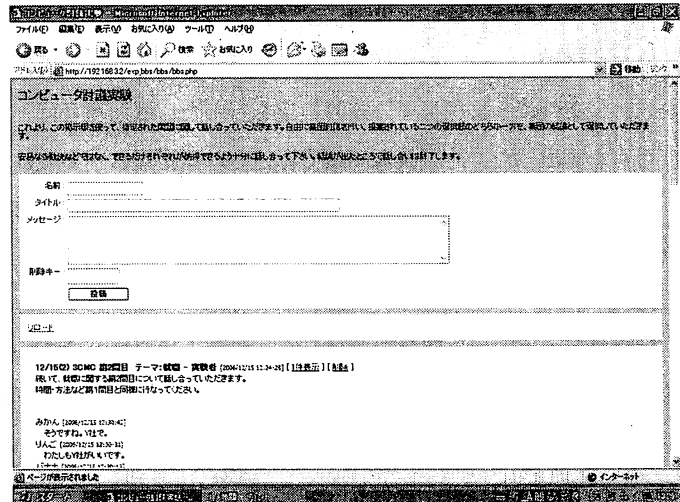


Figure 1 Display layout of BBS system using computer-mediated group discussion

結 果

意思決定の結果については、集団全体に与えられている優位な情報の数が多い選択肢の採択率を求め、条件ごとに採択率の差の検定を行った。質問項目は、各尺度ごとに評定値を加算して尺度得点を算出した。討議後質問紙で測定された指標については、コミュニケーション状況・集団サイズ・情報分配の形態を要因とする3要因分散分析を行った。一方、実験後質問紙にて測定された指標に対しては、コミュニケーション状況・集団サイズを要因とする2要因分散分析を実施した。

討議前個人決定 集団討議前に行なった個人決定における、集団レベルで優位な選択肢の採択率をTable 2に示す。コミュニケーション状況ごとに、情報分配の形態による採択率の差の検定を行ったところ、有意差が見られた(FTF: $\chi^2(1) = 5.17, p < .05$; CMC: $\chi^2(1) = 15.16, p < .01$)。すなわち、集団レベルで優位な決定の採択率は情報共有条件で高く、情報分散条件で低かった。よって、情報分散条件での隠れたプロフィールの操作は妥当であったと考えられる。

Table 2

Preference to more favorable option in pre- and post-discussion
as a function of experimental conditions.

Mode	Group Size	Information Distribution			
		All Shared		Hidden Profile	
		Pre	Post	Pre	Post
TFT	Three ^a	.56	.67	.22	.33
	Five ^b	.80	1.00	.30	.00
CMC	Three ^a	.67	.67	.22	.00
	Five ^b	1.00	1.00	.10	.00

^a n=9, ^b n=10

集団決定 討議後の決定において、集団レベルで優位な決定の採択率をTable 2にあわせて示す。コミュニケーション状況と集団サイズにかかわらず、共有条件では優位な選択肢が採択されやすいが、分散条件では隠れたプロフィールに基づく意思決定は3人FTF集団でしか見られなかった。情報分散条件におけるFTF条件およびCMC条件において、集団サイズ間で採択率の差をFisherの直接確率検定にて検証したが、有意ではなかった(FTF: $p = .21$; CMC: $p = 1.00$)。また、情報分配条件ごとに、討議前個人選好と討議後集団選好の差をMcNemar検定したが、有意差は得られなかった(情報共有条件: $\chi^2(1) = 0.57, n.s.$; 情報分散条件: $\chi^2(1) = 2.29, n.s.$)。以上より、CMCにより隠れたプロフィールを含む意思決定が改善されたとはいえず、仮説3および仮説4は支持されなかった。

参加平等化 参加平等化について、尺度得点の平均および標準偏差を実験条件ごとにFigure

2に示す。3要因分散分析の結果、コミュニケーション状況と集団サイズの有意な主効果が見られた(順に $F(1, 34) = 45.74, 7.48, p < .01$)。すなわち、全体的にFTFよりCMC状態で、集団サイズが大きいときより小さいときに、参加平等化が高く知覚された。加えて、コミュニケーション状況と集団サイズ、情報分配と集団サイズの交互作用がそれぞれ有意であった(順に $F(1, 34) = 17.79, 14.59, p < .01$)。FTFでは集団サイズが大きいときよりも小さいときに参加平等化を知覚しやすかった($F(1, 34) = 24.17, p < .01$)。これに対し、CMCでは集団サイズの違いによる差は見られなかった。また、情報共有条件では集団サイズの違いによる差は見られなかったが、情報分散条件では集団サイズが小さいときに参加平等性が高く知覚される傾向にあった($F(1, 34) = 36.00, p < .01$)。よって、仮説1および仮説2は支持されたといえる。

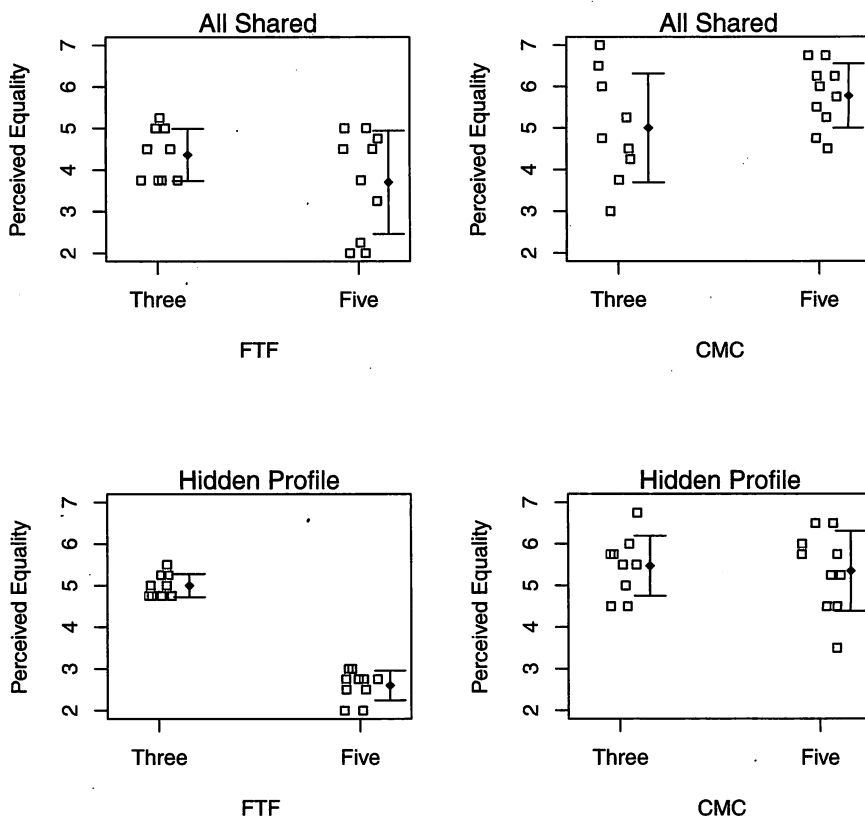


Figure 2 Perceived participation equality in different experimental conditions

同調圧力 同調圧力に関し、尺度得点の平均および標準偏差を実験条件ごとにFigure 3に示す。3要因分散分析の結果、コミュニケーション状況と集団サイズの主効果が有意であった(順に $F(1, 34) = 6.34, 6.99, p < .05$)。すなわち、全体的にCMCよりFTF状態で、集団サイズが小さいときよ

り大きいときに、同調圧力が高く知覚された。加えて、コミュニケーション状況と集団サイズ、情報分配の形態と集団サイズの交互作用がそれぞれ有意であった（順に $F(1, 34) = 14.28, 10.95, p < .01$ ）。FTFにおいては集団サイズが大きいほど同調圧力が大きく（ $F(1, 34) = 20.62, p < .01$ ）、CMCでは集団サイズの違いによる差はみられなかった。そして、情報共有条件では集団サイズの違いによる差は見られなかったが、情報分散条件では集団サイズが大きいときに同調圧力が高く知覚される傾向にあった（ $F(1, 34) = 12.82, p < .01$ ）。

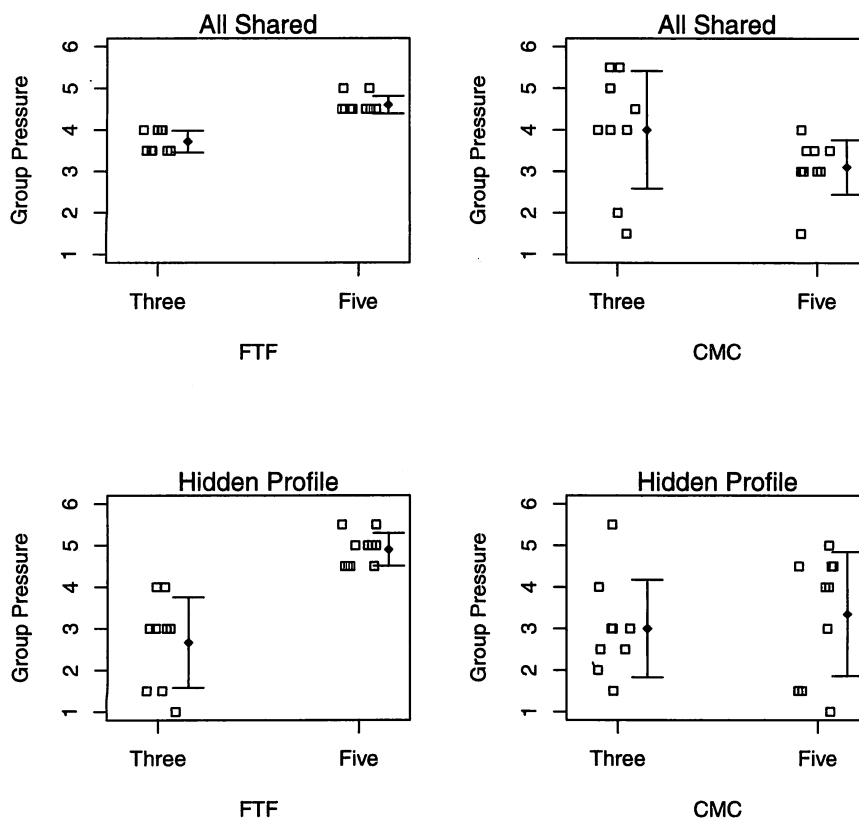


Figure 3 Perceived group pressure in different experimental conditions

情報ろ過機能 情報ろ過機能の尺度得点の平均および標準偏差を実験条件ごとにFigure 4に示す。2要因分散分析の結果、コミュニケーション状況の主効果のみが有意だった（ $F(1, 34) = 10.17, p < .01$ ）。情報ろ過機能は、CMCよりもFTFの方が高かった。

親近感 親近感の尺度得点の平均を指標とする2要因分散分析を行ったところ、コミュニケーション状況と集団サイズの主効果（順に $F(1, 34) = 11.04, 45.66, p < .01$ ）、および、コミュニケーション状況と集団サイズの交互作用が有意であった（ $F(1, 34) = 46.68, p < .01$ ）。FTFでは集団サイズが小さい場合に親近感が高く、大きい場合は低下する（3人集団: $M=5.61, SD=0.70$; 5人集団:

M=2.60, SD=0.39) のに対し ($F(1, 34) = 11.04, p < .01$) CMCでは差は見られなかった (3人集団: M=4.83, SD=0.75; 5人集団: M=4.80, SD=0.82)。

存在感 存在感の尺度得点を指標とする分散分析の結果、コミュニケーション状況 ($F(1, 34) = 4.91, p < .05$) と集団サイズ ($F(1, 34) = 19.84, p < .01$) の主効果、および、コミュニケーション状況と集団サイズの交互作用が有意であった ($F(1, 34) = 39.00, p < .01$)。FTFでは集団サイズが小さい場合は存在感が高く、大きい場合は低下するのに対し (3人集団: M=5.05, SD=0.85; 5人集団: M=2.40, SD=0.32, $F(1, 34) = 57.23, p < .01$)、CMCでは逆に増加していた (3人集団: M=4.06, SD=0.95; 5人集団: M=4.50, SD=0.82)。

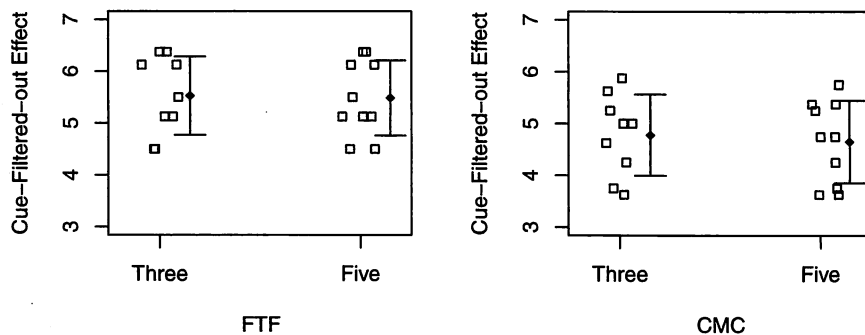


Figure 4 Cue-filtered-out effects in face-to-face and computer-mediated groups

考 察

本研究は、参加平等化効果により、CMCによって隠れたプロフィールを含む集団決定が改善されるかどうかを検証した。その結果、設定された仮説のうち、参加平等化に関する仮説1および仮説2は支持されたのに対し、集団意思決定に関する仮説3および仮説4は支持されなかった。すなわち、全体的に、CMC集団はFTF集団よりも参加平等化を高く知覚した。さらに、FTFでは集団サイズが大きい5人集団よりも小さい3人集団のときに参加平等化を知覚しやすかった。これに対し、CMCでは集団サイズの違いによる差は見られなかった。しかし、TFTだけでなくCMCでも、集団レベルで優位な選択肢が採択されたのは、情報共有条件のみであり、情報分散条件では採択されなかった。よって、CMCが隠れたプロフィールを含む意思決定を改善したとはいえなかった。

参加平等化効果に関しては、仮説通りコミュニケーション状況と集団サイズの交互作用が見られた。その一方で、情報ろ過機能はコミュニケーション状況の主効果のみが有意であり、しかも、CMCよりFTF状況の方が高く知覚されるという、従来の議論とは異なる結果だった。CMCの効果を検討するときには、キーボード入力や画面レイアウトのようなインターフェースの問題が

常に関わってくる。本実験では、現実の電子掲示板(BBS)システムとほぼ同様の標準的なシステムを用いたが、BBSサイトの利用経験の少ない実験参加者にとってはコミュニケーションしづらいところがあったかもしれない。また、CMCの情報ろ過機能は、当事者間の社会的な地位や立場を相互に認識しにくくなるのと同時に、意見の確信度や意見の異なる相手への配慮などを非言語的コミュニケーションにこめて伝達することも困難になる。加えて、相手の表情など非言語的コミュニケーションを通じて、自分の発言の真意が相手にきちんと伝達されたか確認することも難しい。このように、CMCの情報ろ過機能には、自分や相手の社会的文脈を減少させるという正の効果と、非言語的コミュニケーションを通じて自分の行動の意味をコントロールできない(あるいは、コントロールできないのではないかという不安を高める)という負の効果の両面を持つ可能性が考えられる。そして、本研究では、情報ろ過機能の正の効果よりも負の効果の方が強く現れたのかもしれない。CMCの効果を検討するにあたり、システムへの慣れの問題だけでなく、情報ろ過機能の効果を決定する要因の議論が今後必要となると思われる。そして、情報ろ過機能の効果の検証とともに、CMCの参加平等化効果の基盤について、改めて議論を深め、さらなる検討していかなければならない。

次に、実際の集団意思決定の結果を見ると、CMCによる参加平等化の高まりだけでは、隠れたプロフィール問題を改善させるには至らなかった。人には、他者との態度の類似や意見の共有を通じて、自らの態度や意見の主観的妥当性を高める(合意的妥当性)。実験サンプルが十分とはいえず、その点で信頼性の高い結果とはいえない可能性があるものの、本研究の結果は共有情報に基づいた判断を下す傾向がいかに強固であるかを示している。Stasser et al. (1989) は、隠れたプロフィール問題を含む集団意思決定を理論化した情報サンプリング・モデルに基づき、非共有情報の交換努力が高まるとかえって共有情報の相対的優位性が高まるという逆説的な仮説の妥当性を実証している。Stasser et al. (1989) の議論を本研究の結果に照らして考えるならば、CMCの参加平等化効果により集団討議が活発になることが、かえって情報分散条件における、共有情報と非共有情報の優位性の格差を拡大させたと解釈することができる。このように、本研究は、CMC状況で隠れたプロフィールを含む集団意思決定を実施することで、情報サンプリング・モデルの妥当性を傍証していると考えられる。

CMCのBBSシステムでは、各自の過去の発言がログとして残されており、画面をスクロールすることで参照も容易である。しかし、実験参加者たちは、必ずしも自発的に過去の発言を参照することはなく、少なくとも情報分散条件では、そうすることの有効性を認識しているともいえなかった。集団意思決定の支援という観点からは、多くの集団成員が知らない非共有情報を顕在化させ、各集団成員に参照させるような仕組みが必要であるだろう。たとえば、テキスト・マイニングの手法を用いて、非共有情報を重要な情報としてピックアップして提示するような仕組みを組み込んだり、発言内容のレーティングを行い、その際、独自性などの観点からもレーティン

グさせるなどが考えられる。CMCは、単に時間や空間を共有できない人々の間の相互作用を可能にするだけでなく、FTF状況では実現な困難な討議環境を構築することもできる。このように、集団意思決定の支援という観点から、CMCによる集団意思決定の効果をさらに検討していかなければならないだろう。

最後に、集団相互作用状況の知覚という点では、FTFでは集団サイズが拡大するとともに同調圧力が増加し、他の成員との親密性や存在感が低下したのに対して、CMCでは集団サイズによる違いが生じにくくなっている。一般に、集団サイズが大きくなるにつれて、発言権や時間をめぐる競合が激しくなるので、意思決定に対する関与が集団成員間で大きく異なり、集団成員間の格差が大きくなると考えられる。その結果、意思決定への関与の高い成員に対する集団内影響力（同調圧力）認知を高めたり、関与の低い成員に対する親密性や存在感の低下など、集団サイズが大きくなるにつれ、良好な集団内相互作用を行うことが困難になっていくと思われる。これに対し、CMCにおいては、実際には大人数が意思決定に参加していても、参加者には少人数での討議のように知覚される傾向があるように見える。この点は、CMCによる集団討議の利点であるといえよう。一方、実際の電子フォーラムやBBSでは、発言（書き込み）をするのは、全参加ユーザのうちの2割であり、残りの8割のユーザは発言を読むことしかしないことが古くから知られている。したがって、CMCであっても、集団サイズがさらに増加していけば、どこかで集団相互作用に対する認知が低下する臨界点を迎えるものと考えられる。こうした、集団サイズの効果についても、今後の研究で検討しなくてはならないだろう。

引用文献

- Bernstein, E., & Vinokur, A. (1977). Persuasive argumentation and social comparison as determinants of attitude polarization. *Journal of Personality & Social Psychology*, 13, 315-332.
- Bonito, J. A., & Hollingshead, A. B. (1997). Participation in small groups. *Communication Yearbook*, 20, 227-261.
- Dubrovsky, V. J., Kiesler, S., & Sethna, B. N. (1991). The equalization phenomenon: Status effects in computer-mediated and face-to-face decision making groups. *Human-Computer Interaction*, 6, 119-146.
- Hollingshead, A. B. (1996). The rank order effect: Decision procedure, communication technology and group decisions. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, 68, 1-13.
- Hollingshead, A. B. (2004). Communication technology, the internet, and group research. In Brewer, M. B., & Hewstone, M. (Eds.). *Applied social psychology*. Oxford: Blackwell. Pp. 301-317.
- Humphreys, P., & Berger, J. (1981). Theoretical consequences of the status characteristics formation. *American Journal of Sociology*, 86, 953-983.
- 川上善郎・川浦康至・池田謙一・古川良治 (1993). 電子ネットワーキングの社会心理—コンピュータ・

コミュニケーションへのパスポートー 誠信書房

Kiesler, S., Siegel, J., & McGuire, W. T. (1984). Social psychological aspects of computer-mediated communication. *American Psychologist*, 39, 1123-1134.

木村泰之・都築誉史 (1998). 集団意思決定とコミュニケーション・モード—コンピュータ・コミュニケーション条件と対面コミュニケーション条件の差異に関する実験社会心理学的検討— 実験社会心理学研究, 38, 183-192.

オリコン株式会社 (2006). オリコンランキング—女性が結婚相手に求めるもの— ORICON STYLE 2006年8月22日

〈 <http://marriage.oricon.co.jp/news/36931/> 〉

オリコン株式会社 (2006). オリコンランキング—転職をする際に求めるもの(総合)— ORICON STYLE 2006年8月22日

〈 http://career.oricon.co.jp/news/20060822_04.html 〉

Schneider, J., & Cook, K. (1995). Status inconsistency and gender: Combining revisited. *Small Group Research*, 26, 372-399.

白石 崇・遠藤公久・吉田富二雄 (2002). コンピュータネットワーク上における意思決定—集大成極化効果を用いて— 心理学研究, 73, 352-357.

Stasser, G., Stewart, (1992). Discovery of hidden profiles by decision-making groups: Solving a problem versus making a judgement. *Journal of Personality & Social Psychology*, 63, 426-434.

Stasser, G., Taylor, L.A. & Hanna, C. (1989). Information sampling in structured and unstructured discussions of three- and six-person groups. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 67-78.

Stasser, G. & Titus, W. (1985). Pooling of unshared information in group decision making : Biased information sampling during discussion. *Journal of Personality and Social Psychology*, 48, 1467-1478.

Stasser, G. & Titus, W. (1987). Effects of information load and percentage of shared information on the dissemination of unshared information during group discussion. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53, 81-93.

Stoner, J. A. F. (1961). A comparison of individual and group decisions including risk. Unpublished master's thesis, School of Industrial Management, MIT.

Weisband, S. P., Schneider, S. K., & Connolly, T. (1995). Electronic communication and social information: Status salience and status differences. *Academy of Management Journal*, 38, 1124-1151.

付録

実験に用いられた意思決定課題と、情報分配の操作

テーマ	選択肢	条件	分配した優位情報の数(内容)
結婚	A	共有・分散	5 (誠実さ・収入・健康・家庭的・賢さ)
	B	共有	7 (優しさ・包容力・金銭感覚・趣味・面白さ・ルックス・地位)
		独自	3 (*共有条件の7つのうちランダムに振り分けた)
就職	X	共有・分散	5 (高収入・雰囲気・安定性・休暇・勤務地)
	Y	共有	7 (やりがい・職種・勤務時間・通勤時間・将来性・待遇・憧れ)
		独自	3 (*共有条件の7つのうちランダムに振り分けた)

注

- 1) 本論文の一部は、日本グループ・ダイナミクス学会第54回大会で発表された。本研究の実施にあたり、小笠原ちさ氏(平成18年度名古屋市立大学人文社会学部人間科学科卒)の多大な協力を得た。記して、感謝の意を表します。